

★講演内容 「平郡島に武士がやって来た」

1) 大昔の平郡島

今から数万年前の地球は寒冷な気候でしたから極地の氷塊が大きく、瀬戸内には海水がありませんでした。したがって平郡は島ではなくて、草原の中に突き出た山丘でした。原始人がナウマンゾウやオオツノジカなどの巨大獣を追って移動生活をしていました。やがて温暖化によって海水が平郡島をとり巻き、定住生活が始まります。平郡島のあちこちで弥生土器の破片が採取されたり、古墳時代の石斧が出土していますから、先住民がのんびりと豊かな暮らしをしていたことが判ります。

2) 武士の来島

やがて日本が武士の社会になると、平郡島にもその影響が及びます。平郡東浦には平安時代末期の源平合戦の頃に、紀州から武士がやって来ました。そして平郡西浦には鎌倉時代後期に伊予から武士がやって来ました。

3) 東浦への武士の移住

元暦元（1184）年に、源（木曾）義仲の遺児である平栗丸（平群丸）が源頼朝軍に追われ、木曾から紀州へ逃げて来ました。そこで鈴木三郎仲光に助けを求めます。義仲と縁がある鈴木家は平栗丸をかくまい、命を助けようとします。しかしながら、強力な頼朝軍が迫って来ます。かくなるうへは平栗丸を船にて西国へ逃がすしかないと考え、鈴木仲光一党は瀬戸内海を下向して、平郡島の東浦へ辿り着きました。平郡島と目と鼻の先にある熊毛半島において、激しい源平合戦が行われましたが、平栗丸と鈴木一党は参戦することなく、沈黙を守りました。鈴木一党は東浦に住みついて先住民と融和しながら、城の平山城と平根川城の砦を築いて防備を固めました。また早田八幡宮を創建して、結束を図りました。



早田八幡宮

4) 西浦への武士の移住

一方の西浦には鎌倉時代に浅海能信が伊予から渡って来て、小さな祠を置きました。浅海氏は、瀬戸内海を支配していた河野氏の一派で、現在の松山市北端の浅海村に本拠を置いていたことにより浅海の姓を名乗りました。弘安3（1280）年に元が九州に攻めてきた際に、浅海通頼が伊予から平郡西浦へ渡って来て住みつき、平見山城を設けて西方からの侵攻に備えるとともに、重道八幡宮の社殿を創建して武運を祈りました。時が経ち南北朝の合戦にあたっては、暦応3（1340）年に浅海政能が平見山城を堅固にし、重道八幡宮の社殿修築を行って大般若経600巻を奉納し、海蔵院を建立して十一面観音を安置しました。



重道八幡宮

○主催 平郡東島おこし推進協議会

○後援 柳井市教育委員会

○問合せ 平郡出張所 TEL0820-47-2211

地域づくり推進課 TEL0820-22-2111 (462)